

京城帝大法医学教室の血液型研究と植民地医学*

鄭 駿永

はじめに

血液型心理学、血液型別性格分類、血液型別の相性、血液型別ダイエット、血液型占い……。血液型で自分と他人の性格を調べたり人間関係の相性を見たりする光景は、身の回りでも目にとまることがままある。軽い話の種程度に扱われ、血液型にこだわる人でも大体は深刻に考えてなどいないため往々にして見過ごされてきたが、多くの人が数種類の血液型を基準として社会的性格や関係を探るのはきわめて独特な文化的現象である。さらに、血液型性格論や血液型心理学については一般に考えられているほど科学的根拠があるわけではなく、地域的に見れば韓国・日本・台湾など一部東アジア国家でのみ流行している。この事実を念頭に置くならば、こうした独特の血液型文化がどのような歴史的過程を通じて韓国社会に形成され、そのような形成過程が特にどのような社会的・文化的意味を持つのかという問いを投げかけることも社会学的に全く無意味ではなからう。

本稿は、このような問いに答える初発的作業として、韓国社会に血液型分類が導入されるプロセスに注目しようとする試みである。韓国社会に血液型分類が最初に持ち込まれたのは、日帝時期、具体的にいえば1920年代だった。しかるに興味深いのは、今でこそ暇つぶしの娯楽と考えられている血液型分類が、当時は最先端の医学的議論と見なされており、ひいては人種ないし民族の差別的状況を科学的に正当化する人種科学の性格を強く帯びていたという事実である。当時の日本人医学者や朝鮮人医学者は、西欧で発表された最先端の研究成果を基礎としながら、きわめて慎重かつ厳格に血液型の分布を調査し、それが個人的性格や民族的位階とどのような関連性を持つのかを追究した。当時、研究が進むにつれ、個人レベルで血液型は生涯変わることなく維持されるばかりか、集団レベルで民族・人種ごとに固有の血液型分布の比率がかなり安定的に維持されるという現象が観察された。これにともない、血液型研究は人種学・人類学・心理学・犯罪学・考古学などの研究と結びつき、複雑な政治的・社会的含意を持ち始めることになったのである。

本稿では、日帝時期、植民地朝鮮でなされた血液型研究に注目し、これが当時の朝鮮社会を植民地として統治していた帝国日本の人種主義の持つ独特な性格及び課題とかかわって、どのような意味を持っていたのかを探ろうとするものである。日帝時期の血液

* 本稿は「피의 인종주의와 식민지의학: 경성제대 법의학교실의 혈액형인류학」(『醫史學 (Korean Journal of Medical History)』第21卷第3号、2012年、513-550頁)を修正・補完したものである。

型研究は、京城帝国大学医学部・京城医学専門学校・セブランス医学専門学校など植民地医学研究（教育）機関を中心として行われていた。血液型問題は、当時先端医学研究分野だったため、基礎医学・臨床医学を問わずさまざまな分野でなされたが、血液型の体系的調査を行った中心分野は「社会医学」的性格が強かった法医学分野、特に京城帝国大学法医学教室だった。1929年に設置された京城帝大法医学教室は、1930年から4年間にわたり朝鮮人の血液型分布状況についての体系的な調査を実施し、1934年からは範囲を拡大し、5年間、「満洲」・内蒙古地域の東アジア諸民族についての血液型調査を行い歴大なデータベースを構築した（訳者注一「満洲」のカッコを以下省略する）。さらに京城帝大法医学教室は、当時、生体計測等の方法を通じて日本人と周辺民族間の人種的差別性と位階を統計的に立証しようと試みていた京城帝大解剖学教室の体質人類学研究と緊密な協力関係を作り、血液型人類学とも言える研究分野を開拓しつつあった。

本稿では、京城帝大法医学教室を中心に行われた植民地朝鮮の血液型研究の成果を、西欧医学界で進められた血液型人類学の研究潮流、および日本本土の血液型研究の傾向の中に位置づけ、それによって、植民地医学における「人種科学」とは何か、さらには人種的に近接した周辺地域を植民地として併合した非白人帝国主義国家たる日本で人種主義がどのような独特の性格と課題を有していたかを検討したい。

植民地医学の持つ人種主義的な含意という問題は、既存研究でもなじみの深い問題の一つとなっている。特に京城帝大解剖学教室が中心となって行った体質人類学研究については、すでに多くの研究がなされている¹。植民地医学の体質人類学が日本人の人種的差別性をどのように「科学的」に究明しようとしたのかという点、また、そのような調査を行いデータベースを構築する過程で植民地権力の体系的な支援と介入が存在したという事実も先行研究を通じて明らかにされている。しかし、血液型研究の分野は文化史的観点からその人種主義的性格に注目した先駆的な研究があるものの、植民地で行われた血液型研究についての関心は相対的に少なかった²。あるいは、植民地医学の血液型研究に注目したケースにおいても、解剖学教室を中心とした体質人類学研究の延長線上で言及する水準にとどまっていたものが多い。

しかし、「血」と「血統」というものが文化的には人種的、民族的含意を強く帯びているという点、さらに血液型の発見を通して血の遺伝性が科学的に立証されたという点、そして人類がいくつかの血液の形態を通して比較的明白に区別されることができ、実際に人種、または民族間に血液型分布の差異が見つけられるという点などを考慮すれば、血液型の問題は日本の人種主義の特徴、さらには非西欧帝国主義としての日本の植民地主義が直面した課題を明らかにするのに有効な鍵になるかも知れない。したがって、本稿では植民地朝鮮において行われた血液型研究の流れを検討し、これらの研究の結果が

¹ これらの成果の中で重要ないくつかを挙げると次の通りである。坂野徹『帝国日本と人類学者 1884-1952年』（勁草書房、2005年）、김옥주「京城帝大医学部の 体質人類學」（『醫史學』第17巻第2号、2008年）、박순영「일제 식민통치하의 조선 체질인류학이 남긴 학문적 과제와 서구 체질인류학사로부터의 교훈」（『비교문화연구』第10号、2004年）。

² 松田薫『血液型と性格の社会史』（河出書房新社、1991年）、ジェニファー・ロバートソン（堀千恵子訳）「優生学的植民地主義—日本における血のイデオロギー」（『思想』第995号、2007年3月）。特に、松田薫の議論は本稿作成に当たり大いに参考になった。

「植民地朝鮮」という政治的脈絡と結合して、どのようなイデオロギー的な意味を持つようになったのかを考察する。

1 同化主義と人種的差別性：日本の人種主義のジレンマ

よく知られている通り、帝国日本が植民地統治の公式的イデオロギーとして一貫してかかっていたのは同化主義だった³。1870年代以後、直接統治というよりは「保護統治 (protectorate)」を選択していた西欧列強とは異なり、日本は1910年「合併」という形式を通して朝鮮を直接統治した⁴。「東洋の平和を永遠に維持し、西勢東漸を未然に防止⁵」するためには「天皇陛下の一視同仁の下で」朝鮮人に文明の恩恵を享受させ、さらに朝鮮を文明化する必要があるという理由だった。そして、朝鮮併合は「彼我が相合して一家をなす」もので、「欧米諸国の植民地に比べて完全にその趣旨を異とする」と強弁した⁶。地理的に「本国と隔絶」し、人種と風俗も「本国人と融化」しづらい欧米の植民地とは異なり、「地勢相接し、人種相同」した朝鮮は、日本に「混合融化」されるのに全く障害がなく、朝鮮に対する統治は植民地支配ではなかったというのである。統治期間を通して朝鮮総督府は日本人と朝鮮人の人種的差別性よりは文化的、歴史的同質性を植民地統治を正当化する論理として掲げ、最小限の理念型 (ideal-type) としては、「朝鮮人の日本人化」を志向した。現実の植民地的差別は、「時勢と民度の差異」とし、一時的で暫定的なものとなされた。

このように、日本の植民地主義は自身の植民地を公式的には「植民地」と呼ぶことを拒否するという独特な形態を帯びていたため、植民地統治を正当化するメカニズムも西欧の植民地主義と差別化された側面があった。代表的なものの一つが、人種主義問題だった。実際、皮膚の色と外見という可視的な目印を通して、差異を即座にさらけ出す人種主義は、西欧列強が植民地統治に正統性を与えた最も強力なイデオロギー的武器の一つだった。さらに、18世紀以後、人種主義の影響力は文化と科学の領域にまで拡大され、人間と社会を対象にする科学的実践の大部分が人種主義的前提から自由にはなれなかったと言えるほど、強力な文化的ヘゲモニーを行使していた。

だが、このような人種主義の影響力は、日本の植民主義においては西洋ほど顕在化しなかった。日本の植民地主義が人種主義に基づいた西欧列強の植民地支配に批判的だったという点は先に述べたが、日本の学界は西欧科学、及び医学的成果が露わにした人種

³ もちろん、植民地権力が標榜した「同化主義」が具体的にいかなる内容と政治的含意を持っていたかについては時期や状況によって異なるので注意を要する。そのため「同化主義」は日本の植民地主義を説明する概念ではなく、むしろ日本の植民地主義を理解するために分析され、説明されるべき概念だと主張する日本の教育史学者の駒込武の指摘は極めて妥当である。駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、1996年)を参照。実際、1990年代中期から韓国の学界においても同化主義を問題領域として設定し、分析を試みる論文が多数出された。

⁴ Peter Duus, *The Abacus and the Sword: The Japanese Penetration of Korea, 1895-1910* (University of California Press, 1995), pp. 8-11.

⁵ 「社説：日鮮融化学論」(『毎日申報』1915年2月8日付)。

⁶ 『朝鮮統治三年間成績』(朝鮮総督府、1914年)、10頁。

主義的含意についても批判的な態度を取るケースが多かったのである⁷。

このことは、当時非西欧国家としては唯一植民地帝国を作り上げた日本が直面したジレンマ的状况と無関係ではない。日本は、日清戦争と日露戦争を経て「かろうじて」帝国主義列強と肩を並べることができた。東北アジアにおいて自国に代わってロシアの南下を防いでくれる同盟国を探していた帝国主義ヘゲモニー国家イギリスの全面的支援と、非干渉主義に基づいて太平洋地域の現状維持を望んでいたアメリカの黙認があったからこそできたことだった⁸。加えて、日本が植民地にした周辺東北アジアは、文化と歴史の面で伝統的に日本に勝っていたか少なくとも対等な地域だった。資本主義世界システムがもたらした圧倒的な物質文明の格差を「白人」という可視的な指標に置換し、これを通じて植民地支配を人種主義的に正当化した西欧帝国主義列強の典型的な支配方式を、日本がそのまま流用することは不可能だった。西洋から見れば日本人は「植民地化された」周辺の東アジア人と異ならぬ「非白人」に過ぎず、周辺の東アジアから見れば日本の近代の文明的格差ごときで植民地支配を受け入れるはずもなかったためである。日本が植民地帝国を作り上げ、周辺東アジア地域に対して「同文同種」と「同種同源」を正当化の原理としてかかげたのもそのためである。日本の内部でも、日本民族の形成を「混合民族論」の立場から理論づけようとする傾向が優勢であり、現在の日本民族の優越性を、多様な文化と民族を受け入れ自身のものにしてきた歴史的・文化的能力に求めようとする試みとして現れた。かかる状況においては、周辺民族に対し日本民族の優越性を主張しようとする議論は、学術や文化の主流的議論からは斥けられたり周辺化されたりする傾向が強かった。こうした「人種主義」の主張は、人種的類似性を基盤として周辺民族を日本民族に同化させようとしていた植民地統治上の公式理念と多分に衝突しかねないものだったからである。

しかし、このような衝突の可能性があるからといって、ただちに日本の植民地主義が人種主義を排除することにはならなかったことに注意しておく必要がある。周辺東アジア民族の「同化＝日本人化」は、極限まで推し進めていくと、論理的には植民地支配者としての日本民族の現実的位階を掘り崩していく危険性も内包しているからだ⁹。したがって、同化主義と背馳しない限りで、日本民族の現状の特権的地位を「自然なもの＝当然のもの」として正当化する人種主義の論理は、依然として植民地支配のためには必要だったのである。

日本植民地主義が直面していたこのようなジレンマ的状况に関連して、最近、これを人種主義の次元から分析しようとする試みが現れつつあることは注目に値する。酒井直樹、Takashi Fujitani、駒込武などの研究者は、同化主義を過度に強調し、これを西欧の植民地主義と対立させ日本特有の現象と見なしてきた既存の研究傾向を批判しつつ、日本の植民地主義のあり方を19世紀および20世紀初頭の「帝国の時代」(Hobsbawm)の文脈の中で理解し、西欧の植民地主義とともに批判の俎上に上げねばならないと主張し

⁷ 小熊英二『単一民族神話の起源—(日本人)の自画像の系譜』(新曜社、1995年)参照。

⁸ 川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』(名古屋大学出版会、2007年)を参照。

⁹ 정준영『京城帝国大学과 植民지 체계모니』(ソウル大学校博士論文、2009年8月)、88-90頁。

ている¹⁰。彼らによれば、人種主義により積極的な規定を与え、「皮膚の色など、恣意的に選ばれた特徴を重要な基準として選択し、このような特徴を持って人間集団をカテゴリー化し、否定的／肯定的に評価を与えて特定の人間集団を排除／包摂していくイデオロギー」¹¹と見なすならば、人種主義は日本の植民地主義と対立するものではなく、むしろその核心概念として捉えることができ、これを通じて日本の植民地主義が持つ特徴を「世界史的」視角から批判的に分析できる可能性も開かれるのである。

同化主義を基礎とする日本の植民地主義を、西洋の植民地主義と差別化する日本特有の現象として、事実上分析を放棄するのではなく、日本の植民地主義が人種主義を中核としつつも公式的には同化主義を強調し人種主義に距離を置くほかなかったのではないかという問題を究明することで、日本の植民地主義を世界帝国主義の歴史のなかに位置づけることができるとし、植民地主義批判の脈絡からの評価も考え合わせる必要があるとする彼らの主張は、日本の植民地主義を理解する上で示唆するところが大きい。このような視角は、欧米の植民地主義と日本の植民地主義の間に存在した対立のみならず、欧米と日本の植民地主義の間に存在した「敵対的共犯関係」に対する批判的考察をも可能にしてくれるだろう。

このような点から見て、西欧の血液型研究から出発した植民地医学の血液型人類学研究は、日本の植民地主義が直面していたジレンマ的状况がどのようなものだったのかを明確に示す事例の一つである。血液型人類学は、皮膚の色や髪の色、容貌など可視的な指標に関心を寄せた他の人種科学とは異なる。血液型人類学は、可視的には識別しがたい「血」の人種主義を根拠としていたから、「人種的近親性」を公式的に植民地統治の根拠としてかかっていた帝国日本が、その近親性故に抱いていた「不安」を解消し、「非可視的に」日本人の人種の優越性を確認しうる科学的装置となり得た。さらに、植民地医学における血液型人類学研究は、当時の最先端医学だった西欧医学界・人類学界の血液型研究と同時代的に進められたため、単に西欧の人種科学に受動的に対応するというレベルを超え、西欧の人種科学に対応する一方で共謀もしつつ「敵対的共謀関係」を構築していった。

科学的研究を標榜し徹底して実証的になされた彼らの研究の結果が、研究者の「個人的」立場にかかわらず、植民地統治と緊密に結びつき、また植民地権力の状況の変化に呼応して変化していったのもこのような事情による。

2 血液型と人種主義：その歴史的系譜

それでは、血液型人類学という人種科学はどのように形成されたのか。まず血液型研究が人種主義と結合するにいたる歴史的系譜を西欧の研究の流れを通してみておこう。

1901年、オーストリアの免疫学者 Karl Landsteiner による血液型の発見は、19世紀以後

¹⁰ 駒込武 「「帝国」論への提言—「帝国のはざま」から考える」(『年報日本現代史』第10号、2005年)。

¹¹ Robert Miles, *Racism* (Routledge, 1989).

の現代医学の発展、特に外科の進歩における画期的な事件と評価することができる¹²。当時外科手術は三つの難題に直面し、発展が滞っていた。第一に、手術の痛みをどのように緩和させるのかという麻酔の問題、第二に、手術中や手術後に発生する炎症の問題、第三に、手術中に必然的に発生する出血の問題である。血液型の発見による安全な輸血法の開発は外科手術の難題中の一つだった出血の問題を一気に解決し、外科手術の革新的な発展を招いた。Landsteinerの血液型の発見は、関連医学分野の発展に寄与しただけでなく、第一次世界大戦などで殺傷の規模が拡大していた当時の社会的状況において多くの生命を救う決定的な機会にもなった。

血液の類型で人間を四つに分類しようという Landsteiner の発見¹³は、単なる医学的発見に限られるものではなく、それを越えて同時代の人々の社会的想像力、特に人種学的想像力を刺激する機会にもなった。ドイツの内科学者 Emil von Dungern は動物の血液型調査を通して、大部分の哺乳類は B 型であり、チンパンジーと人へのみ A 型が見出されることを発見し、血液型の起源と進化、遺伝問題に関心を持ち始めた¹⁴。彼はドイツの 72 家系、348 人を対象として血液型調査を実施し、血液型が世代間でメンデルの法則に従って遺伝するというを確認し、その結果を弟子 Ludwick Hirschfeld と共著で発表した¹⁵。Landsteiner が血液型を発見した時点からすでに人種主義的な思考が、血液型研究の発展に重要な動機として作用し始めたのである。

Von Dungern の弟子 Hirschfeld は、師匠の人種主義的な前提を発展させ、血液型は B 型から A 型へと進化するという仮説を設定してこれを現存人種、民族に対する血液型検査を通して検証しようと試みた。1918 年当時、セルビア陸軍の中央細菌検査所で勤務していた Hirschfeld は、第一次世界大戦が終わった後、マケドニア平原に集結していた軍隊および付近の住民、16 カ国の約 8,500 人を対象にして血液型調査を行った。この調査結果を発表したのが、1919 年 10 月 *The Lancet* 誌に掲載された「異なる人種間の血液の血清学的差異—マケドニア前線における調査結果 (Serological Difference between the Blood of Different Races: The Result of Researches on Macedonian Front)」という論文である(図 1¹⁶)。

この論文において Hirschfeld は、異なる人種や民族の間に現れる血液型分布の差異を表す指数として「生化学的人種係数 (Biochemical Race Index = $\frac{A \text{ 型因子 (A+AB)}}{B \text{ 型因子 (B+AB)}}$)」を提示した。彼は、B 型に比べて A 型が進化した形態であるという仮説が、現実に存在する人種と民族の血液型分布においては白人種であるほど A 型の出現率が高くなり、有色人種であるほど B 型の出現頻度が高まるという傾向として現れるという仮説を立てた。そして、実際に調査した結果においても予測と同様に現れると主張した。イギリス人 (4.5)、フランス人 (3.2)、イタリア人 (2.8)、ドイツ人 (2.8)、オーストリア人 (2.5) など、ヨー

¹² 黄尚翼『역사 속의 醫人들』(서울대출판부, 2004 年)、229-280 頁。

¹³ 実際に 1901 年の Landsteiner の論文では、三つの血液型集団だけが明らかになった。四つめの血液型集団の存在については、翌 1902 年に Landsteiner の弟子にあたる Castello と Sturli が究明した。

¹⁴ 松田薫、前掲書、35-40 頁。

¹⁵ Laurence H. Snyder, "The Inheritance of the Blood Groups," *Genetics* 9, 1922, pp. 467-468.

¹⁶ Ludwick and Hanna Hirschfeld, "Serological Difference between the Blood of Different Races: The Result of Researches on Macedonian Front," *The Lancet*, October 1919, p. 675.

ロッパ列強の場合、A型因子を保有する人がB型因子を保有する人より二倍以上多いのに対して、黒人(0.8)、ベトナム人(0.5)、インド人(0.5)など、有色人種の植民地の場合には反対の結果が現れたというのである。Hirschfeldは、人種係数が2.0以上である人種/民族を「ヨーロッパ型」、そして1.3未満である人種/民族を「アジア-アフリカ型」と分類し、2.0と1.3の間の人種/民族集団、例えば、アラビア人(1.5)、トルコ人(1.8)、ロシア人(1.3)、ユダヤ人(1.3)などを「中間型」とした。そして、このような調査結果に基づいて、インドがB型人種の発生地、北ヨーロッパがA型人種の発生地である可能性があるとも述べた。

このようなHirschfeldの研究結果は、第一次世界大戦直後、血液型が治療にもたらず寄与への関心が高まっていたなか、世界的な注目を浴びることになった。さらに後続研究は、個別の民族/人種に固有の人種係数は一つの地域においていくつかの民族/人種と混ぜ合わさり、長期間生き続けたやすく消え去らず、特有の血液型の属性が遺伝を通じて比較的維持されるという事実も示した。

THE LANCET. DR. L. & H. HIRSCHFELD: SEROLOGICAL RACIAL DIFFERENCES. [OCT. 10, 1919] 875

accepted Lohr's (now Roth's) in 1914, the fact that remarkable easily dissolved vessels. Shown by the preceding what, proved an unnecessary that the eyes of the lizard, which is the same as the eye of the lizard. In a lizard a long slender tendon fixed to the roof of the orbit presses in the usual fashion to the lower corner of the orbit. At the level of the optic nerve the tendon breaks a slip in the lamellae muscle, which muscle represents the retractor built of mammalia; it

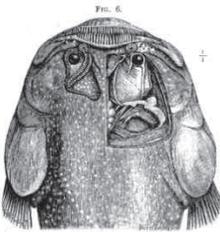


Fig. 6. Orbit of the Stargazer, dissected to show the ciliary muscle.

arises from the back of the orbit, runs parallel with the optic nerve, and is inserted into the anterior coat of the eye. When the muscle contracts it acts on the tendon and draws the distal tendon across the eye. It is a nice arrangement for a muscle to be inserted into the tendon of another muscle. There is an example in man in the foot; the muscle is called adductor. The pyriformis is curiously modified. In cordilife it is relatively big and muscular throughout. In birds it is one-fourth muscle and three-fourths tendon. In man the pyriformis, entirely represented by a tendon, is actuated by the motor (cranial) nerve. In sheep and many mammals the retractor works the distal tendon membrane indirectly by acting on the globe. In man it is represented by a Sphenoidal canal, which serves as the wall of a lymphatic. In a fish, teleostei, some of the orbital muscles become electric organs.

ELECTRIC MUSCLES IN THE ORBIT.
The contractile substance of muscles is actomyosin and enclosed in a heat, called the sarcoplasm. The jelly in each muscle head receives the terminal of a nerve nerve and serves as a muscle for the discharge of the force developed to nerve cells. Embryologists have discovered that in spite of the difference in structure of muscle cells and nerve cells they have the same origin: that nerve cells are modified to originate impulses which are conducted by the nerve and discharged by the muscle.
Organs are not strictly adapted to one purpose; they have a main function and subsidiary functions. Changes may gradually affect an organ and a secondary function become habitual. This happens in a very interesting degree in some fishes, for delicate tracts of muscle are so modified that the electric property predominates. In such fishes the electrical muscle. The ordinary muscle, are under voluntary control and become exhausted by use.
Electric muscles exist in several fishes—torpedo, skate, electric eel (which is not a fish), the cleopatra and the therapy, a fish of peculiar shape living in the Nile. It was named by the ancient Egyptians and called an ammonite. The proof that electric organs are modified muscle is furnished by the skate. In the fish the electric

muscle lies in the tail. When the skate is young and like a fish, it is electric organ are muscle, and it is not successful in tracing the transformation of the muscle cells into electric cells.

The eyes of the stargazer are on the top of the head and the mouth is in such a position that, without knowledge of the causing contrivance, in the orbit, it would not be easy to understand how this fish swims food. Each eye is roofed with a patch of soft skin, and this covers an electric organ. (Fig. 4.) The fish lies in the water with its mouth open; it is paralyzed by an electric shock, tangle into its open mouth. In an example and muscle of Dalmanera the stomach contained a number of small swiftly swimming fish, such as young herring and mackerel. The electric organ lies in the middle of the orbital muscle, and receives a large branch from the third nerve and branches from the trigeminal (Sphenoid).

Progress in the acquisition of reliable knowledge concerning life depends on accurate instruments. For example, the electric structure of muscle was unknown before the invention of the microscope, and the elucidation of the physics of muscular contraction required the acquisition of delicate measuring apparatus. An accurate knowledge of animal heat was obtained by the use of a reliable and delicate heat meter; the thermometer, an instrument which proved that outside have within themselves a source of heat. To-day clinical thermometers are so common in surgeries as the eye called Macleod's eye. John Hunter, when he had by experiment, the thermometer, as an instrument which proved that outside have within themselves a source of heat. To-day clinical thermometers are so common in surgeries as the eye called Macleod's eye. John Hunter, when he had by experiment, the thermometer, as an instrument which proved that outside have within themselves a source of heat.

The study of the muscles concerned in the movements of the mind could only cause you to reflect deeply on the absolute simplicity of the physiology of muscles. Such a study may lead some of you to make discoveries in physics and zoology that will one day make the world gaze with astonishment.

Dr. L. & H. HIRSCHFELD. Acad. Surgeon, 1894, etc.
London U. S. Army, 1895, etc.
From "The Physiology of Man" by L. & H. Hirschfeld, 1919, p. 100.

SEROLOGICAL DIFFERENCES BETWEEN THE BLOOD OF DIFFERENT RACES. THE RESULTS OF RESEARCHES OF THE MACEDONIAN FRONT.

By Dr. LUDWIK HIRSCHFELD, COMBAT AT THE FRONT OF SERACE.

AND DR. HANNA HIRSCHFELD, OF THE CENTRAL BACTERIOLOGICAL LABORATORY, BEHAL SERBIA ARMY.

How Problems and Researches in Immunization.
It is a well-known fact that it is possible to produce antibodies by injecting an animal of one species with the red blood corpuscles of an animal of a different species. These antibodies, which we call hemagglutinins, are capable of reacting with the erythrocytes of any representative of the species used for immunizing. A rabbit immunized with the blood of a man of one race will produce agglutination for hemagglutinins which will agglutinate in a group of lower degree the blood corpuscles of men of any race. The hemagglutinins have specific affinity for species and cannot bring to bear in the solution of the race problem.
But, as English showed in game and our Doctors and Hirschfeld's dogs, we do possess a means of finding serological differences within a species. This is effected by immunization in the species. The reason for this can be explained in a few minutes. The same proportions which are common to the giver and receiver of blood serum give rise to an antibody, that they do not fall as foreign by the immunized animal.
* Paper read before the National Medical Society, June 10th, 1919, and before the American Medical Association, June 15th, 1919, at the 49th Annual Meeting at St. Louis, Mo.
† The authors wish to thank Professor W. C. Cresswell, M.D., for his valuable criticisms of the manuscript.

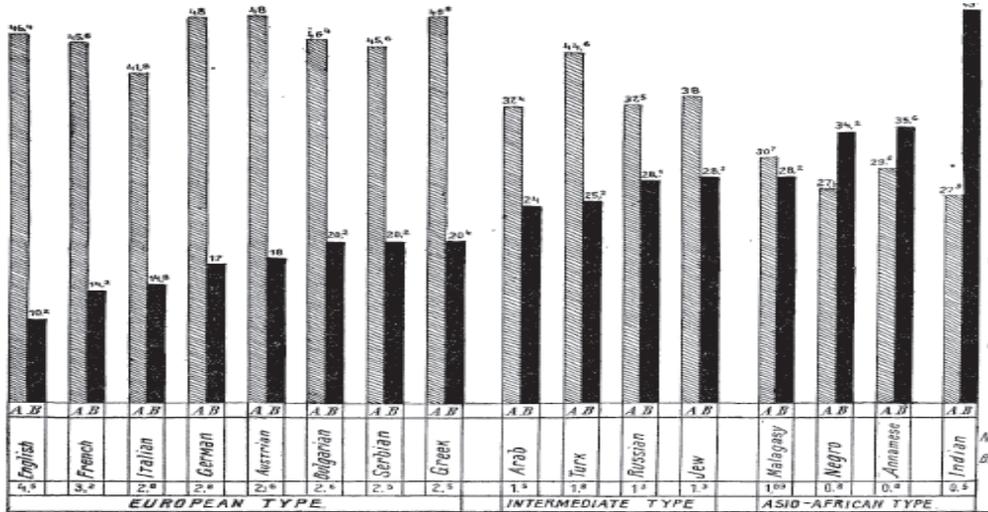


図2 Hirschfeldの人種区分 (L. & H. Hirschfeld 1919: 678)

ドイツ人とハンガリー人、ジプシーが数百年間雑居しているハンガリーの地域を調査した Verzar と Weszeczky (1921) は、人種係数で見ればドイツ人が 2.9、ハンガリー人が 1.6、ジプシーが 0.6 を示すと報告した¹⁷。これは、ドイツ人がヨーロッパ系、ハンガリー人がウラル-アルタイ系、ジプシーがインド系という当時の言語学的、歴史学的研究とも一致するものとして、人種係数が人種/民族集団を識別する固有の指標と考えられることを強く示唆している。

実際、Hirschfeld 以後の血液型研究は、新しい科学的発見に基づいた人種係数を通じた人種/民族の区分をより精密に補完していく一方、人類学、犯罪学、心理学などの分野における人種係数の応用可能性を模索する方向に進んでいった。例えば、アメリカで 1910 年代から血液型研究の普及のため熱心に活動していた医学者 R. Ottenberg は、Hirschfeld をはじめとする血液型研究の成果を吸収し、血液型人類学の分類体系をさらに精緻化した。その作業は、当時の血液型研究の傾向を特徴的に示していると言えるだろう¹⁸。当時、世界各地では Hirschfeld にしたがって血液型分布調査に基づいた多様な人種/民族に固有な人種係数を付与する研究が「流行のように」拡散していた。しかし、各人種/民族についての人種係数が蓄積されればされるほど、人類を三つの集団に分ける Hirschfeld の分類体系が、現実には観察される人種/民族間の多様な人類学的差異を反映しえないという問題点も明らかになり始めた。この点で Ottenberg が注目したのが、胎生学分野において報告された血液型 0 型に関する研究だった。個体発生論の次元で考えれば、人の血液型のうち A 型と B 型は胎生 6 ヶ月以後に、AB 型は胎生 3-6 ヶ月の間に観察され、3 ヶ月以前までのすべての胎児の血液型は 0 型である。これは、B 型を最も古い血液型だと考えてきた戦前までの研究を覆すものとして、固体発生が系統発生を繰り返すものだとすれば 0 型が最も原初的な類型でありうるということを示唆している。

さらにアメリカのコネル大学の免疫学者である Arthur F. Coca はアメリカ・インディアンの血液型調査を通して Hirschfeld の分類法が間違っていることを強く示唆する論文を発表した¹⁹。彼は 947 名のインディアンを調査したが、その結果は 0 型 77.7%、A 型 20.1%、B 型 2.1%、AB 型 0.4% であったと報告した。この人種係数は Hirschfeld の分類法では 8.2 になり、ヨーロッパ型の中でも A 型が最も高い類型になってしまう。Coca はこのような調査結果に基づいて、0 型血液型が地域、民族にかかわらず平均的に分布すると仮定し、人種係数を設定した Hirschfeld の議論にははっきりと限界が表れていると指摘した。

Ottenberg は、Coca のアメリカ・インディアン研究が Hirschfeld 分類方式の限界と人種分類の指標として 0 型の比率の重要性を端的に示す事例であると確信した。アメリカ・インディアン及びオーストラリア原住民は人種係数のみで見れば、10.0、8.8 で「ヨーロッパ型」よりむしろ高い数値を示すが、実際には全体の血液型のうちで 0 型が他の血

¹⁷ 桐原眞一・白麟濟「日鮮人間ニ於ケル血液属別百分率ノ差異及血液属別特有性ノ遺伝ニ就テ」(『朝鮮医学会雑誌』第 40 号、1922 年 12 月) 4-5 頁による。

¹⁸ R. Ottenberg, "A Classification of Human Races Based on Geographic Distribution of the Blood Groups," *The Journal of the American Medical Association* 84(19), 1925.

¹⁹ Arthur F. Coca & Olin Deibert, "A Study of the Occurrence of the Blood Groups among the American Indians," *Journal of Immunology* vol. 8, 1923.

液型に比べて極端に高く現れる（アメリカ・インディアン 77.7%、オーストラリア原住民 57.0%）。したがって、人種係数による分類のみでは不十分であり、0型の比率も同じように人種分類に反映させなければならないというのが、Ottenberg の立場だった。彼は、1925年時点までに世界各地に報告された血液型の比率と人種係数を収集する一方、これを六つのカテゴリーに分けた。彼は、Hirschfeld の「中間型」において南中国人、日本人、ハンガリー人などを0型の比率が低い「湖南型」として独立させ、Hirschfeld の「アジア-アフリカ型」も0型の比率がB型の比率より低い「インド-満洲型」と0型の比率が高い「アフリカ-南アジア型」に分けた。Hirschfeld の分類体系であれば「ヨーロッパ型」に分類されなければならないアメリカ・インディアン、オーストラリア原住民、エスキモーなどは「太平洋-アメリカ型」として独立させた²⁰。

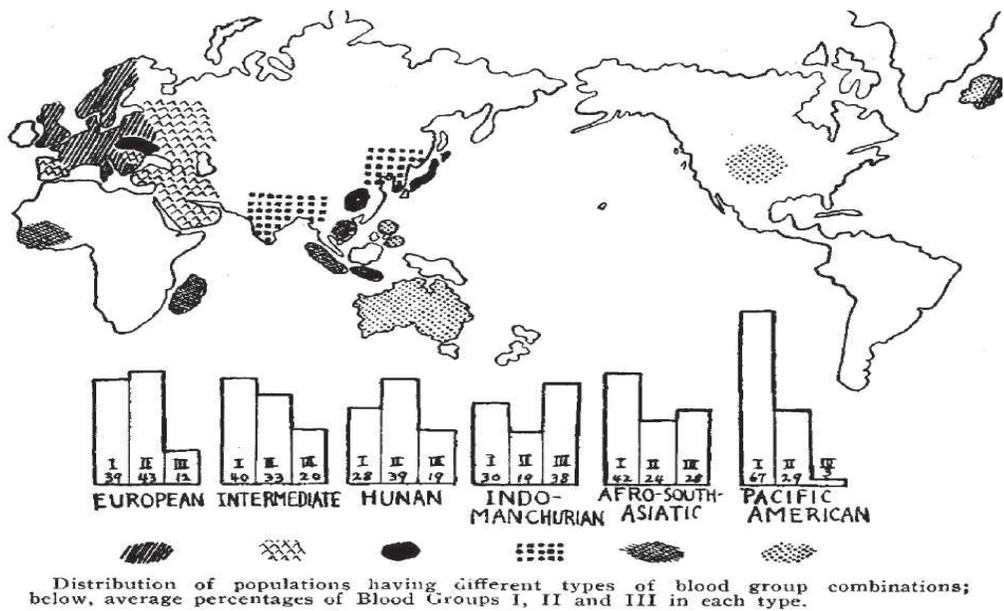


図3 Ottenberg の人種区分 (Ottenberg 1925: 1395)

このように、1919年に発表されたHirschfeldの研究は、植民地統治を通じて構築された人種の位階的秩序を「自然的なもの」として正当化する新しい科学的根拠として、西欧の学界に大きな影響を及ぼした。Hirschfeldが人種係数を作った際、設定していた仮説はOttenbergなどの後続研究者たちに徹底的に論駁されたが、まさに人種係数は「生化学係数」「民族指数」など、名を異にしつつも継承され、「血液型人種主義」の科学性を裏づける「普遍的基準 (global standard)」として位置づけられた。世界的な資本主義の形成と帝国主義化という歴史的過程の中で設定された西ヨーロッパ列強と植民地有色人種の二

²⁰ その後も人種係数に基づき、血液型によって民族や人種を分類しようとする試みは、血液型の属性に関する研究および世界の各地域での血液型分布に関する報告が次々と出されるのに伴い、絶えることなく繰り返された。このような血液型人類学の研究が当時の西欧人種主義および優生学とどのように関連して進んだかについては一層精密な考察が必要だと思う。この問題は今後の研究課題とする。

分法は、血液型の分布と比率というかたちで数値化 (enumeration) される過程を通して、人種間の本質的な差異として固着した。その上、このような人種主義的な含意は血液型研究という当時としては最新科学の外見を装っていたため、差別を受けた有色人社会でさえも無条件に拒否しがたいほどの強力な文化的権威を持っていた。血液型研究を含めた西欧の人種主義科学に対して、非西欧社会では唯一「帝国主義」を確立しえた日本がアンビバレントな態度を取るしかなかったのは、見方によっては当然のことだったとも言えよう。

3 血液型人種主義と日本の医学界

実のところ、Hirschfeld の研究結果は 1919 年の発表当時から、日本の医学界でも焦眉の関心事だった。軍事医学と緊密に結合していた当時の日本の医学界にとって、輸血技術の開発は、当面の課題の中でも重要な位置を占めていたからである。そして、Hirschfeld の人種係数もすぐさま重要課題として浮かび上がった。当時の日本医学界において血液型の問題は全く馴染みのない問題でもなかった。ドイツに留学し、Dungern のもとで学んだ原来復は、1916 年に長野で血液型調査を実施している²¹。しかし、1919 年の人種係数発表以後、血液型調査ははるかに明確な目標意識を持って日本各地で実施された。Hirschfeld の人種分類において日本人はどこに位置するのかという疑問がそれである。先に述べたように、当時の西欧で流行していた人種主義科学に対して、日本の学界の立場は曖昧な面が強かった。日本は、周辺の東アジア地域に対しては「脱亜入欧」を標榜し、「帝国」として君臨しえたが、西欧人の視線から見れば、一つの有色人種の国家に過ぎないという現実が最も赤裸々に現れる領域がまさに人種主義科学だったためである。そして、このような問題は血液型人種主義においても同様に現れた。

日本の周辺、とりわけ朝鮮人と満洲人の血液型の分布を調査し、これを Hirschfeld の分類に基づいて分析する試みは比較的早い時期から現れた。九州帝大の法医学教室の深町穂積は朝鮮と満洲に赴き、ソウルや平壤で朝鮮人の血液型事例 363 件、中国の東北 3 省 (奉天省、吉林省、黒龍江省) における満洲人の血液型事例 199 件を蒐集した。1922 年にはこれらの資料に基づいて、朝鮮人の人種係数は 1.16 の中間型の下位範疇に該当し、満洲人は 0.75 でアジア-アフリカ型に該当すると報告した²²。

このように、植民地に関しては「手早い」調査が試みられたが、日本の本土をその対象として血液型分布を調査し、それを Hirschfeld の分類に適用する研究にはあまり積極的ではなかった。上述した深町の研究によれば、朝鮮人と満洲人の血液型分布を報告した当時の日本本土に関する学術報告は全部で 3 件で、Hirschfeld の研究以前からすでに血液型に関心を持っていた原来復の長野事例の報告を除けば、松原という外科医師の仙台の事例報告、そして深町自らが行った九州の事例報告だけだった。その後も、日本の医学界では特定地域をその対象とする血液型の調査が続けられ、またこのような事例研究に

²¹ 原来復については、松田薫、前掲書、13-34 頁を参照。

²² 深町穂積「朝鮮人及満洲人ノ人種学的生物化学的比率ニ就テ」(『国家医学雑誌』第 430 号、1922 年)。

基づいた日本人の平均的な人種係数を推定しようとする試みも行われたが、地域別の人口比例を基に日本全域における血液サンプルを組織立って抽出し、それを通じて日本人全体の平均的な人種係数を分析する研究はなかなか現れなかった。1940年になってようやく、東京帝大の法医学教室の古畑種基教授チームの研究により、体系的に構築された血液型データベースに基づく日本人の血液型分布の持つ特徴を統計的に厳密に分析した結果が報告された²³。植民地医学の血液型分布調査に比べると、むしろ遅れていたと言わざるをえない。

表 1 日本内地における血液型分布と人種係数（小林ちよ 1940：731）

	調査総数	血液型 (%)				人種係数
		AB	A	B	O	
関東	104,060	9.11	37.39	22.18	31.32	1.49
奥羽	28,522	9.41	36.36	22.73	31.50	1.42
東海	48,429	9.04	38.01	22.06	30.89	1.51
北陸	73,030	9.75	37.14	22.53	30.58	1.45
近畿	52,425	9.39	38.68	21.74	30.19	1.45
中国	29,965	9.58	39.96	21.34	29.12	1.55
四国	19,437	8.90	41.04	21.13	28.93	1.60
九州	124,105	9.62	39.48	20.75	30.15	1.66
北海道	9,674	9.37	37.04	21.90	31.69	1.62
	489,647					1.53

ところが、興味深いのは1920年代、30年代当時の日本本土では血液型に対する関心は決して低くはなかったということである。医学界では血液型に関連する西欧医学の研究成果をほとんど同時に受け入れ、様々な臨床実験による多様な方面での医学的活用が模索された。また、医学にとどまらず、心理学や犯罪学などの隣接の学問分野からもこのような医学的な成果に注目して、これを応用した様々な研究結果が発表された。血液型に関する日本の大衆の関心も、30年代に入ると「血液型ブーム」とも呼ばれるほど高まっていった。そのために、血液型人類学に関する研究のこのような「遅れ」はやや意外に思われよう。これは血液型人類学、とりわけ人種係数にかかわる日本医学界の困惑とも無関係ではなかった。

東京帝大の法医学教室の統計的分析によれば、日本人の平均的な人種係数はおおよそ1.53だった。この研究以前の学術報告も、日本人の全体的な人種係数は大体1.5-1.7の間と推定している。換言すれば、Hirschfeldの分類体系によると日本人は「中間型」に属することになる。いくら西欧列強に伍して植民地帝国を構築しようと、人種科学の観点からすれば、日本人は依然としてヨーロッパ人とは「区別」される有色人種に過ぎないという事実が露わになったわけだ。朝鮮や満洲などの周辺の東アジア民族は日本の「中間型」よりも劣る「アジア-アフリカ型」だということがかろうじて判明したが、そのよ

²³ 小林ちよ「日本に於けるABO式血液型分布の統計的観察」(『犯罪学雑誌』第14号、1940年)、727-735頁。

うな差異も日本の内部地域に焦点を合わせると境界があいまいになってしまう。上記の表からも分かるように、人種係数の観点からみると日本内部の地域差は激しかった。日本列島の南部方面へ行けば行くほど、人種係数が高まって「ヨーロッパ型」に近づく一方、日本列島の北部に上るほど人種係数は低くなり、「アジア-アフリカ型」に接近する現象が観察できる。1920年代の地域レベルで行われた調査報告を調べると、九州地方の場合1.84で「ヨーロッパ型」に接近しているとの報告がある一方、列島の北部地域では朝鮮の南部地方とさほど区別がつかない人種係数が見出されるケースも少なくはなかった。言い換えれば、人種係数を通してどうにか確認された日本人と朝鮮人の格差もまたさほど明確ではないという問題も露わになってきたわけだ。

したがって、当時の日本医学界の内部では Hirschfeld の人種係数、Ottenberg の人種分類を完全に否定はしなかったものの、西洋のように人種係数を人種の優越性を立証する決定的な基準として見なすことには懐疑的な見解が強かったと見受けられる。とりわけ、軍人を対象にして行われた様々な血液型試験は、このような懐疑的な見解をさらに強化するのに決定的な役割を果たした。劣等な血液型として知られた B 型が、軍人としての職務にはまさしく適合した職務能力を発揮するという臨床実験の報告や、血液型による軍人たちの適性と能力が異なるといわれるという研究結果²⁴などは、個人の社会的性格を識別するのに血液型が有効な手段になりうることを示唆した。

そして、このような臨床的結果は、心理学者の古川竹二によって気質説と結び付けられ、血液型性格論、あるいは血液型気質相関説などに発展していった²⁵。その後、日本の血液型研究は西欧の血液型人種主義の影響を持続的に受けつつも、個人の社会的性格を究明する方向へと発展していき、人的資源の適切な配置と活用によって動員を最大限に図ろうとした帝国日本の政策と緊密に結合しながら「隆盛」するに至った。

しかし、「血液型と性格」という日本特有の血液型研究傾向が、必ずしも血液型人種主義を否定したり、排除したりするものではなかったことには注意しなくてはならない。深町の研究から分かるように、Hirschfeld の人種係数と Ottenberg の人種分類は周辺民族に対する日本民族の人種の優越性を正当化するのに依然として有効に機能したからだ。したがって、帝国日本は西欧人種主義科学に含まれた露骨な有色人差別の論理に対してはある程度批判的距離を保ちつつも、人種の位階的秩序に関する科学的な正当化については周辺民族に対する植民地支配に適用して差別と統合の境界を再調整していった。日本本土の血液型研究が血液型人種主義よりは血液型と社会的性格間の関係を究明する方向へと進んだのに対し、植民地の研究は血液型人種主義に基づいて日本と植民地、周辺民族間の人種主義的位階秩序を科学的に正当化して、さらには同化主義を標榜する植民地権力と緊密に結びついて、血液型を通じて民族の移動と結合を測定する方向へと特化するようになったのもこのためだった。内地や外地にそれぞれ特化した帝国日本の血液型研究は、西欧列強と日本が人種主義を媒介にどのように敵対的な共謀関係を形成して

²⁴ 平野林・失島登美太「人血凝集反応ニ就テ」(『軍医団雑誌』第157号、1926年)、中村慶「血液種属ト兵卒ノ個性ニ就テ」(『軍医団雑誌』第169号、1927年)、岩波浩「海軍兵学校生徒の血液型と諸観察」(『犯罪学雑誌』第5巻第4号、1932年)など。

²⁵ 古川竹二の血液型気質相関説については、大村政男『新編血液型と性格』(福村出版、2012年)第2章を参照。

いたのかを露わに示している。

4 植民地朝鮮の血液型研究

前述したように、日本本土の血液型研究は、1930年代に入ってから社会的性格との関連性を中心に「ブーム」とも呼ばれるほどの大衆的な関心の的となっていたが、植民地朝鮮では早くから本土とはやや異なる方向で血液型研究が進んだ。Hirschfeld の人種係数および人種分類に基づいて、日本と周辺の東アジア民族との位階関係を明確にする血液型人種主義の研究がそれだった。その中心的な役割を担ったのは、後述する佐藤武雄が主任教授を務めた京城帝大の法医学教室だったが、植民地医学における血液型人種主義に関する学問的な関心は Hirschfeld の研究結果が発表された直後の 1920 年代初期にまで遡る。

(1) 人種的差別性と歴史的近親性：京城医専の血液型研究

植民地における朝鮮人の人種係数を調査し、これを在朝日本人の事例と比較する研究が初めて発表されたのは、日本本土で朝鮮人と満洲人の人種係数を推定した九州帝大出身の深町穂積の研究とほぼ同じ時期である 1922 年だった。京城医学専門学校の外科学教室の桐原眞一と白麟濟が発表した「日鮮人間ニ於ケル血液属別百分率ノ差異及血液属別特有性ノ遺伝ニ就テ」がこれである。彼らは朝鮮総督府医院の外来患者、病院職員、京城監獄の囚人などをその対象に、在朝日本人 502 名、朝鮮人 1167 名の血液型を調査し、その結果を 1922 年 7 月に『東京医事新誌』第 2299 号に発表した。その後、これに忠北と全南の朝鮮人の事例を付け加えて、同じタイトルで 1922 年 12 月の『朝鮮医学会雑誌』第 40 号に再び掲載した。この研究はソウルと平壤だけを調査した深町穂積の研究が持つ限界を補い、朝鮮人における地域的な違いが意味するところを明らかにしようとしたもので、調査の結果は表 2 の通りである。

表 2 桐原・白麟の朝鮮人及び在朝日本人の血液型調査結果

調査地域	血液型 (%)				人種係数
	AB	A	B	O	
平北 (354)	7.6(27)	27.4(97)	34.5(122)	30.5(108)	0.83
京畿 (311)	7.1(22)	32.8(102)	32.8(102)	27.3(85)	1.00
忠北 (112)	12.5(14)	36.6(41)	33.0(37)	17.9(20)	1.08
全南 (171)	12.9(22)	41.5(71)	15.7(44)	19.9(34)	1.41
在朝日本人京城 (502)	7.8(39)	42.2(212)	20.6(103)	29.4(148)	1.78

桐原・白麟 (1922) から再構成。

この表からもわかるように、桐原眞一と白麟濟は Hirschfeld の人種分類に基づいて、在朝日本人と朝鮮人の間には人種的な位階が存在しているという結論を導き出した。在

朝日本人の人種係数は1.78で、人種分類上に「中間型」として分類できるのに対し、朝鮮人の場合は人種係数からすれば「アジア-アフリカ型」に属するという。ただし、朝鮮人の人種係数は地域によって相当な違いを見せる。とりわけ南部地方の場合には「中間型」に属する場所も観察できた。桐原眞一と白麟濟はこのような結果がHirschfeldの研究および日本本土の研究とも一致すると結論付けたが、朝鮮南部の事例は日本民族と朝鮮民族の間における歴史的、言語的な類似性と関連性を思わせるとし、次のような推定を付け加えた²⁶。

是ノ結果ニヨリテ大和民族及朝鮮民族ノ祖先ノ如何ヲ推定シ能ハザルハ勿論ナルモ、尚他ノ歴史的、人類学的或ハ言語学的ノ研究ト彼是相對照セバ蓋シ多少ノ推定ヲトシ得ベキカ。

実際に、1910年代末から20年代の初期における当時の植民地史学者の歴史認識は「日鮮同祖」という植民地統治の趣旨には原則として同意しつつも、現実における朝鮮人と日本人の差異は認める見解をとっていた。このことは歴史的には朝鮮の古代史を「南鮮」と「北鮮」に二分して、「南鮮」の場合は日本との密接な歴史的・文化的・人種的な関連性を強調する一方、「北鮮」は楽浪遺跡などの発掘成果に基づいて中国の漢族勢力の移入に注目する傾向として表れた²⁷。日本人は朝鮮の南部の人々を含めてアジア大陸の各地から渡ってきた各民族が「優勝劣敗」や「駆逐」「合体」の過程を経て構成されたために、日本の朝鮮支配は「南鮮」との歴史的な近親性を考えると必然的な出来事だという論理だった²⁸。このような歴史認識には、現実の日本人は現実の朝鮮人と同じではなく、しかも現実の朝鮮半島の南部の朝鮮人たちとも完全に一致していないということを前提として、現在の日本人の優越的な位置や植民地支配を正当化する構造を持っていた。朝鮮の北部と南部の間に画然とした人種係数の違いが観察できるという桐原眞一と白麟濟の議論は、一方では朝鮮人が日本人より人種的に劣等だということを科学的な事実として認定し、もう一方では朝鮮の地域レベルでは朝鮮南部と日本の間における「日鮮同祖」の可能性も求めている点から当時の植民地官学研究者の歴史認識と軌を一にしている。このように、人種主義の前提と同化主義の課題を実証的なデータによる統計的秩序の下で統合しようとする植民地医学特有の観点が、すでにこの研究から十分に窺えるのである。

²⁶ 桐原眞一・白麟濟「日鮮人間ニ於ケル血液属別百分率ノ差異及血液属別特有性ノ遺伝ニ就テ」(『朝鮮医学会雑誌』第40号、1922年12月)、281頁。

²⁷ 黒板勝美「朝鮮の歴史的観察」(『朝鮮』第78号、1921年)、57頁。

²⁸ 黒板勝美、今西龍など、1910-20年代に朝鮮総督府の嘱託になり官学者として活動した日本人歴史家たちの活動については、정상우「朝鮮総督府의 朝鮮史 編纂事業」(ソウル大学博士論文、2011年8月)を参考にした。

(2) 分裂する「朝鮮人」の範疇、再編する「朝鮮人」の位相：京城帝大法医学教室の朝鮮人の血液型研究

そして、このような植民地医学に特有の血液型研究は、1926年に京城帝国大学医学部が設立されて以降、法医学教室によってより発展した形で進んだ。法医学教室は1929年に設置され、東京帝大で法医学を専攻し、東京地方裁判所の医務嘱託として勤務した佐藤武雄が教室の主任教授として赴任した。佐藤の法医学教室は植民地当局の要求に応じて法医学的な知見を提供する一方、血清学および血液型に関連する研究を主導した。佐藤武雄の履歴を追っていくと、京城帝国大学に赴任する以前に血液型に関連する研究を発表したことは確認できない。確かに彼は大学在学当時から法医学とともに血清学を専攻していたため、血液型研究自体に馴染みがないわけではなかった。だからと言って、法医学教室が設置されて1年あまりで、教室の研究人員がようやく整うや直ちに朝鮮人の血液型の分布状況に関する体系的な調査に着手した²⁹のは、主任教授である佐藤の単なる研究上の興味に端を発していると考えerには無理がある。法医学教室の朝鮮人血液型調査が1931年に「東照宮三百年記念会」より450円、33年と34年に「帝国学士院」より1,350円など、京城帝大の他の教室に比べ圧倒的な財政的支援を受けていたこともこれを例証している。

1934年まで計4年間にわたる法医学教室の朝鮮人の血液型調査は、朝鮮全域を大きく北部・中部・南部の3個の圏域に分けて行われた。調査地域としては北部にあたる咸南、咸北、平南、平北の4道から19ヵ所、中部にあたる江原道の1道から3ヵ所、南部にあたる慶南、全南の2道から10ヵ所、そして行政的に全南に入れられていたものの、言語や風俗、歴史が異なる済州島の1ヵ所が選定され、総計24,929件の血液サンプルが採集された。このように彼らが圏域を分けるなど調査地の選定に慎重であったのは、既成の研究に対する彼らの批判的な立場に起因する。彼らにとっては、京城医専の桐原・白麟濟の研究や九州帝大の深町の研究はその事例数も少なく、統計的な代表性も確保できていなかったため、彼らの算出した人種係数は信頼し難かった。しかも、さらに看過できない問題は、彼らの研究が人口の移動が頻繁で、様々な地域の人々が入り混じって暮らす都市部を事例地として設定したことだった。ハンガリーの研究事例³⁰などを通して、ある血液型の属性は遺伝によって比較的安定的に維持され、人種／民族集団が識別できる固有の指標として用いられることは明らかになったが、人々の移動が稀で「血の混じり」が少ないほど、地域固有の血液型の分布の属性は一層明確に表れるはずだった。既成の研究は調査上の便宜のためか、ソウル・平壤などの都市部を中心に血液型調査を行ったため、その算出された数値がはたして正確に京畿道（朝鮮中部）と平安南道（朝鮮北部）の血液型的特徴を示しているのかが不明瞭だった。法医学教室が調査計画当初から、血液型サンプルの抽出には当時の朝鮮の人口学的特徴を反映することとともに、地理的に人口移動に適さず歴史的にも大きな移動がなかった場所、言い換えれば「純血」度の高い地域を調査地に選定することに細心の努力を傾注したのもそのためだった。

²⁹ 佐藤武雄・国房二三・野村捷一・萩森壽「朝鮮人の血液型に就いて（第一報）」（『社会医学雑誌』第539号、1931年）。

³⁰ 上述した Verzár Weszeczky の1921年の研究が代表的なものである。

「京城帝国大学に奉職しているという地理的な利点」³¹を十分に活用して朝鮮人の血液型分布についての膨大で精巧なデータベースを構築し、その結果を血液型人類学の立場から分析した研究成果が、京城帝大法医学教室の名で日本本土の『犯罪学雑誌』に発表した「朝鮮人の血液型」という報告である。植民地権力の体系立った協調や後援の下で血液採取の厳密性を強調した点、京城帝大の解剖学教室の人体測定作業と連携してその結果を参考にしながら研究を進めた点³²など、この研究は既成の朝鮮人の血液型研究にとどまらず、当時の日本本土における血液型研究全体を圧倒しうるものだった。

表 3 京城帝大法医学教室の朝鮮人血液型調査結果

調査地域	標本数	血液型 (%)				人種係数
		AB	A	B	O	
朝鮮北部	11,093	9.81	30.60	31.07	28.51	0.99
朝鮮中部	6,468	9.60	31.49	29.70	29.21	1.05
朝鮮南部	6,465	11.37	35.99	26.67	25.79	1.25
朝鮮全体	24,026	10.25	37.34	29.53	27.88	1.07

佐藤・国房・野村・萩森 (1935) から再構成。

既成の朝鮮人の血液型に関する調査が、調査の限界を意識して朝鮮人全体の平均的な人種係数を論文に明示できなかったのに対し、法医学教室のこの研究は統計技法の厳密性に基づいて朝鮮人全体は 1.07、朝鮮北部は 0.99、朝鮮中部は 1.05、朝鮮南部（済州島は除く）は 1.25 という人種係数を抽出した。そして、この結果を Hirschfeld の人種分類および Hirschfeld 以後の血液型人類学の研究成果に照らし、世界人種の血清学的地図上における朝鮮民族の位置を確定しようとした。例えば、A 型と B 型の関係に焦点を合わせる Hirschfeld の人種分類に従えば、「朝鮮北部、中部及び全朝鮮は「アジア-アフリカ型」に属し、朝鮮南部は辛うじて「中間型」に属」する。しかし、O 型の比率まで併せて考慮する Ottenberg の人種分類に従えば、朝鮮民族は A、B 型に比べて O 型が少ないためにいかなる範疇にも属さず、「湖南」型や「インド-満洲」型の中間に位置づけられる。さらに A、B、O、AB の四つの血液型に三つの遺伝因子の頻度数を取り出す Felix Bernstein の技法³³を活用して調査の結果を補正し、Ottenberg の人種分類を遺伝因子頻度の比率によって再調整した L. Snyder の人種分類³⁴に適用すると、朝鮮全体および朝鮮北部、朝鮮中部は「インド-満洲」型に属するが、朝鮮南部は日本が属する「湖南」型に分類しうるという結論が導かれた。

³¹ 佐藤武雄・国房二三・野村捷一・萩森壽「朝鮮人の血液型」(『犯罪学雑誌』第 1359 号、1935 年)、692 頁。

³² 佐藤武雄・国房二三・野村捷一・萩森壽「朝鮮人の血液型に就いて (第一報)」(『社会医学雑誌』第 539 号、1931 年)、1-2 頁。

³³ ドイツの数学者 Felix Bernstein が血液型研究に及ぼした影響については James F. Crow, Felix Bernstein and the First Human Marker Locus, "Perspectives: Anecdotal, Historical and Critical Commentaries on Genetics, The Genetics Society of America, 1993 を参照。

³⁴ Laurence H. Snyder, Human Blood Groups: Their Inheritance and Racial Significance, "American Journal of Physical Anthropology 60(2), 1926.

結局、総じていえば、京城帝大の法医学教室の研究は、南部へ行くほど人種係数が高まるとした京城医専の研究結果と類似の結論に辿り着いた。しかし、桐原眞一と白麟濟の研究が朝鮮内部の地域的な違い、つまり朝鮮南部と北部の血清学的な違いを仮説的に推定したのに対し、法医学教室の研究は朝鮮北部と朝鮮南部は少なくとも血液型人類学の立場からは「完全に別個に発達してきた」明らかに異なる実体だという点を明白にした。「朝鮮人全体」という範疇においては「日本人」との人種的な違いを明確化しながらも、科学的には「朝鮮人全体」よりも「朝鮮北部」と「朝鮮南部」という地域範疇が一層重要だという、言い換えれば朝鮮という民族範疇の解体を含意している点に注目する必要がある。

このように地域範疇のレベルから朝鮮という範疇を解体し、朝鮮南部と日本本土の間における人種的な近親性を客観的で科学的な事実として追認すると、朝鮮北部は周辺の東北アジア諸民族といかなる血清学的な関連性を持つのかという問いが自然に浮上してこよう。ところが、法医学教室は朝鮮北部と関連を持つ周辺の諸民族の中から中国人、つまり「漢族」を意図的に排除している点が注目に値する。これは人種係数から見れば、北満地域、モンゴル地域の場合は朝鮮南部から朝鮮北部に行くほど人種係数のパターンが低くなる傾向をそのままに保っているのに対し、漢族が密集する中国地域に行くほど人種係数のパターンは逆転して再び高まる現象が観察されたためだと推測できる。これは、中国人は同じパターンが確認できる「日本-朝鮮-満蒙」とは異なる人種だということ物語る客観的証拠として提示された。

さらにこの研究が発表された1930年代半ばは帝国日本の大陸侵略が本格的になり、満洲地域に傀儡国家である満洲国が設立された時点と重なっている。満洲国を打ち立てた日本は侵略行為の正当性をイデオロギー的に確保するため、満洲を中国から分離させる多様なレベルでの「文化工作」を試みた。満洲地域で暮らすモンゴル族や満洲族をはじめとする「北方民族」の歴史的身份を強調し、これによって漢族中心の華北地域と北方民族中心の満洲・内モンゴル・新疆地域が歴史的にもともと分離した地域だったという主張を強化した。そして、この満洲の「北方民族」と日本の「内地人」との間を媒介する朝鮮史の役割もさらに強調点が増え変化していく様子が見られる。上述したように10年代と20年代の主流の植民地史学者の歴史認識は、朝鮮史の停滞的で従属的な性格を示すために、漢四郡の設置など朝鮮北部の中国支配を強調する傾向が強かった。しかし、30年代には濊貊・高句麗・女真などの朝鮮北部で活動した民族を強調し、彼らを満蒙地域の北方民族らの民族的移動と緊密に関連付けて把握しようとする傾向が著しくなった。つまり、朝鮮史を大陸の東北アジアに従属させ、日本を中心とするいわゆる「満鮮史」を構築しようとする試みが現れた³⁵。「古より一方には支那又一方には内地に対して……関係の深い」朝鮮から、「古来満蒙と最も密接なる関係を有し、往時文明東漸の

³⁵ 日本人植民地史学者の「鮮史」認識についての古典的な説明については、김용섭「日本・韓國에 있어서 韓國史叙述」(『역사학보』第31号、1966年)を参照。

折にも橋となつた」³⁶ 朝鮮へと認識の転換が図られた。そして、これに日帝の大陸侵略を関連づけて、朝鮮は「今又文明西漸の橋となるべき使命を有」³⁷ するという認識を付け加えた。

このように微妙な政治的視点より、法医学教室は日本人・朝鮮人と中国人の人種的な関連性について科学的証拠を挙げて否認する一方、北方民族に関する既成の血液型研究に基づいて朝鮮北部と満蒙人との人種的関連性を仮説的に設定した。朝鮮北部の人種係数は単に日本と満蒙の中間に位置するだけではなく、「満蒙から北鮮へ、朝鮮の北部から南部へ、そして南鮮から日本へと移行したことを物語る漸变的な価値ないし形姿」を示すものかも知れない。言い換えれば、満蒙地域、蒙疆地域についての厳密な血液型調査を通して「日本人、朝鮮人、満蒙人は互いに漸变的に移行し、混成する過程」によって出来上がったということを科学的に立証する必要が提起されたわけだ。朝鮮人の血液型の調査を一応仕上げた法医学教室が、後続作業として満蒙人、つまりモンゴル族およびツングース族の血液型分布の調査に着手したのは論理的に至極当然な流れだった。

(3) 「純血」から「混血」へ、東亜諸民族の移動：京城帝大法医学教室の満蒙人の血液型研究

京城帝大の法医学教室は、朝鮮人の血液型に関する調査作業をとりあえず終え分析を残すのみとなった1934年の夏以降、北満洲や内モンゴル一帯の「満蒙人」についての血液型調査に本格的に着手した。5年間にわたるこの調査は主に夏休みに行われた。法医学教室の研究者たちは5回にわたって北満洲の奥地や内モンゴル・新疆地域に派遣され、血液型のサンプルを採取・分析して、各調査ごとに結果を整理し日本法医学会で発表して『犯罪学雑誌』に投稿した³⁸。調査の時期と場所、対象とサンプル数を整理すると表4のようになる。

³⁶ 引用は、1926年京城帝大の設立当時に初代学長の服部宇之吉が大学の使命を語った時の表現（『文教の朝鮮』第10号、1926年6月、3-7頁）で、後者の引用は、赴任とともに満洲国を視察してきた第4代学長の山田三良が京城帝大の使命を時代に合わせて再規定した時に使った表現である（「卒業式に於ける山田総長の式辞」『京城帝国大学学報』第73号、1933年4月6日）。

³⁷ 山田三良の上記引用。参考までに、日帝の大陸侵略とともに京城帝大の大学理念も再び変化するが、これについての分析は、정준영「京城帝国大学과 植民地회계모니」(서울大博士論文、2009年8月) 186-191頁を参照。

³⁸ 1次調査結果：佐藤武雄・島崎浩「第一回満蒙人（蒙古族・通古斯族）血液型調査」（『犯罪学雑誌』第11号、1937年）。

2次調査結果：佐藤武雄・牧藤久吉「第二回満蒙人（蒙古族・通古斯族）血液型調査」（『犯罪学雑誌』第11号、1937年）。

3次調査結果：国房二三・牧藤久吉「第三回満蒙人（蒙古族・通古斯族）血液型調査」（『犯罪学雑誌』第12号、1938年）。

4次調査結果：牧藤久吉「第四回満蒙人（蒙古族・通古斯族）血液型調査」（『犯罪学雑誌』第12号、1938年）。

5次調査の記録は、佐藤武雄「血液型検査準備調査並ニ法医学上ノ調査概況」（『満蒙文化研究会パムフレット』第6集、1942年）に紹介された。表4は以上の文献によるもの。

表 4 京城帝大法医学教室の満蒙・蒙疆地域血液型調査

	時期	調査地域	調査対象	調査事例数
1次	1934年8月上旬から約3週間	満洲国軍官学校(家宅) ハルビンからロシアへ向かう濱州線鉄道付近の興安警備軍	漢族を除く モンゴル族(4族) ツングース族(4族)	総855件 (モンゴル族335件、 ツングース族520件)
2次	1935年7月2日～27日(25日間)	満洲国北部および北東部の奥地(龍江省、濱江省、黒河省、興安東省の8カ所と2つの都市)	モンゴル族(1族) 満洲族を含むツングース族(5族)	総755件 (モンゴル族60件、 ツングース族695件)
3次	1936年7月～8月の1ヵ月	龍江省9カ所 興安東省2カ所	他の部族から孤立して狩猟生活を行うツングース族(4族)	総163件 (ツングース族163件)
4次	1937年7月上旬から9月上旬までの約2ヵ月	興安北省3カ所 龍江省1カ所 興安東省3カ所 熱河省1カ所 興安西省1カ所 内モンゴルの察合爾省	モンゴル族(3族) ツングース族(3族) ヤクート族	総670件 (モンゴル族506件、 ツングース族162件、 ヤクート族2件)
5次	1940年8月3日～26日(23日間)	熱河省 内モンゴル連合自治政府		

『犯罪学雑誌』等に掲載された京城帝大法医学教室の調査報告書より再構成。

表4からも分かるように、法医学教室の満蒙人の血液型研究は、関東軍が軍事的に掌握していた満洲国の国境地帯にほぼ集中し、満鉄が管轄する鉄道を中心とした付近で孤立して生活していたモンゴル族の部族とツングース族の部族を主な調査対象にした。彼らは孤立した生活のお蔭で「血の混じり」がない「純血」状態を長い間保ってきたため、人種係数の面から北方民族の歴史的な特徴を保存していると仮定された。ところが、興味深いのは、法医学教室の満蒙地域調査が回を重ねるにつれ、満洲国の国境地帯に接近していくのみならず、5次調査の場合は国境も越えて新たに日本の占領地域になった内モンゴル地域にまで拡大していったことだ。言い換えれば、日本の軍事的な膨張とともに調査の範囲も拡張していった様子が窺える。

調査は常に軍事的な危険に晒されたため、満洲と内モンゴルを占領していた日本軍の保護や支援が不可欠であった。それについて、京城帝大の医学部卒業生の鄭槿陽が1936年当時の法医学教室の様子を次のように描写した文章がある³⁹。

法医学教室では只今満洲、朝鮮、各処を巡回して血液型決定に教員を総動員している。奨学金ももらいながら仕事をしている。この調査のために教授と助手一人が満蒙の旅行中に匪賊の襲撃を受けて奇跡的に一命を取り留めたのはまだ記憶に新しい。

ここでいう奨学金とは、1935年から3年の間に、服部報公会より支援を受けた3,000円を指しているようだが、法医学教室の調査は帝国政府の金銭的支援や大陸を占領した関東軍の保護の下で「匪賊の襲撃」という危険を冒しながら行われた「大陸文化戦争のた

³⁹ 鄭槿陽「研究室風景」(『四海公論』第2巻第6号、1936年6月)、107頁。

めの尖兵」だった。当時の京城帝大教授尾高朝雄の表現を借りれば、「軍旗の征くところ、科学の旗も共に進まなければならない」⁴⁰のであった。そしてこの結果が、満蒙人の血液型調査を通して構築された、日本を中心として朝鮮・満洲・モンゴルが同心円的な構造を持つ巨大な人種的地図だった。

ところが、京城帝大の法医学教室は1940年代に入り、さらなる認識の転換を模索するようになる。法医学教室の主任教授であった佐藤武雄は、1941年に京城帝国大学の大陸文化研究会が主催する大陸文化講座において、「血液型より見たる東亜諸民族の移動」という題目で講演を行った⁴¹。この講演で彼は法医学教室の朝鮮人血液型の研究と満蒙人血液型の研究成果を一つに集大成しつつも、それまで堅持してきた血液型人種主義の基本前提を覆す新しい見解を提示した。

上述したように、Hirschfeld以来、人種係数は血液型が姻族／民族の孤立した固有性を表現できるという前提に基づいていた。長期間の混居にもかかわらず、各民族が固有の人種係数を維持できることを示したハンガリーの事例が典型的だ。法医学教室も朝鮮人の血液型、満蒙人の血液型の研究段階においては人種係数の精密な抽出のために孤立した地域を事例として選ぶなど、この前提を徹底的に守っていた。ところが、その法医学教室が以前の立場を覆して、人種係数と血液型の分布は集団の固有の属性を表すものではなく、集団の間における孤立と交流を意味するものだという仮説を設定した。

「純血」ではなく、「混血」に焦点を合わせて、日本、朝鮮、満洲、モンゴルの各地域の間で行われてきたと推定される「集団間の移動と交流」を本格的に追跡し始めたのだ。すでに1935年の研究において、法医学教室の研究チームは人種係数が朝鮮人の人種／民族の個別性を表すものから、「北鮮→中鮮→南鮮→内地」という血の交流や連続性を意味するものだという仮説を提示していたが、1941年のこの講演では「朝鮮」「満洲」「モンゴル」などの血液型を通じて示される民族の人種的固有性を明示的に否定し、「インド→満蒙族→満洲人→北鮮人→南鮮人→日本人」という移動や交流の系譜を提示したのだ。このような法医学教室の立場の変化は、急迫する戦況の下で「大東亜共栄圏」を模索していた当時の帝国日本の立場とも緊密に関連していた。

おわりに

このように帝国日本の血液型研究は、西欧人に対しては「人種的劣等性」、植民地の人々に対しては「人種的近接性」として特徴付けられる帝国日本の独特な位相の下で、一方では西欧人の人種的視線を無力化し、もう一方では植民地の人々に対する人種的差別や位階を正当化する有力な科学的道具として作用した。特に、植民地医学の血液型研究は、同化主義を標榜する植民地権力の政策的志向とも緊密な関連性をもって、そうした作用を後押しした。日本の植民地主義は、「白人対有色人種」という二項対立的な人種主

⁴⁰ 京城帝国大学大陸文化研究会編『蒙疆の自然と文化—京城帝国大学蒙疆學術探検隊報告書』（古今書院、1939年）、16頁。

⁴¹ 佐藤武雄「血液型より見たる東亜諸民族の移動」『続大陸文化研究』（岩波書店、1943年）。

義の構図に抵抗しつつも、血液型という可視的な指標を用いて植民地支配により引き起こされる差異を回復不可能な本質的な差異へと置換する、人種主義の統合と排除の原理をそのまま踏襲するという側面において西欧の植民地主義と「敵対的共謀関係」を形成していた。そして、このような敵対的共謀関係は科学的権威と結合しながら、植民地における強力な文化的ヘゲモニーを構築する契機になった。輸血問題についての実践的な関心から京城医専で桐原眞一と共に血液型調査を行い、後には母校の教授となった白麟濟は、「朝鮮人は亜、阿型、日本人は中間型」⁴²と述べ、朝鮮人の人種の劣等性を追認した。京城医専の学生時代、朝鮮人に対する民族的差別に反発し、三・一運動を主導したと言われる白麟濟が血液型人種主義の科学的権威に屈服する態度を示したのだ。同じく三・一運動当時、獄苦を味わい、その後には朝鮮人としては初の法医学者になったセブランズ医専教授崔棟は、1935年の『朝鮮医報』第5巻第3号に「朝鮮人の血液」という論文を発表した。京城帝大法医学教室の朝鮮人血液型研究を露骨に意識しながら作成したこの論文で、崔棟は論理的な根拠は欠いたままに、血液型の地理的分布を用いて白頭山を基点として古代朝鮮民族が韓半島に拡散する過程について長広舌をふるった。京城帝大の法医学教室が植民地権力との体系的な結合の下で厳密な統計的技法を通じて構築した「東亜諸民族の移動」と交流が、崔棟の論文では転倒した形で登場する。このように、血液型人種主義は日本と西洋の敵対的共謀関係の下で強力な科学的権威を保った。そして、植民地的学知を生産する京城帝大の存在は、このような科学的権威が創出する植民地ヘゲモニーの効果にある程度依存していた。

このように、血液型研究は最初から人種主義的含意を強く帯びていた。とりわけ日帝時期に行われた朝鮮人に関する血液型研究は、当時の帝国日本が立たされていた非西欧帝国主義というディレンマと密接に関連していることが確認できる。1945年以前から日本で「異常に」流行った血液型性格論についての研究もまた、西欧とアジアの間に微妙に挟まれた存在だった日本が持つ人種科学に対するアンビバレントな立場、そして戦争に突き進む中、限られた人的資源を最大限に適切に配置しようとする国家主義的な欲望と無関係ではなかった。我々が何気なく交わしている血液型の言説には、このように植民地的近代を貫く知識-権力の系譜が潜んでいることを念頭に置いておかねばならない。また、今後も、今日まで伝わるこのような知識の系譜を明らかにしていかねばならないと考える。

(原文：韓国語、日本語訳：金炳辰・松田利彦)

⁴² 引用の文章は、『東亜日報』1927年7月21日付記事のタイトルである。